

「生きているなあ」と実感

幼児教育学科一年

新田 倫子

九月十六日から「歩き遍路体験学習」のために、これまでの授業で準備してきました。

休日を利用して一日歩き体験(約三十キロ)をし、改善すべき点などをレポートにまとめました。講義でお遍路の歴史なども学びました。一番苦労したのが装束作り。裁縫が得意でない私は先生や友達に手伝ってもらい、なんとか作りあげる事ができたのです。

この白装束は「かつて行き倒れになった遍路が

故郷に帰ることなく、その地に葬られた時の死装束。決死の覚悟の表れでもあった」と文献にあり

ました。白装束の意味が分かった時、私が装束を着ることが何か申し訳なく感じましたが、「最後まで歩きたい」と決意し

ました。装束の後ろには「生命・人間の尊厳の探求」と書いてくれました。その装束に身を包み五日間の旅に出発しました。

生命……。私は山道と国道を歩いてみて、何かが違うなあと思いました。昔のままに残されている山道は、土が柔らかく緑や土の匂いがしました。

竹藪の中、狭い遍路道、

青く透き通った川に魚が泳いでいました。こんな

自然に触れたのは久しぶりで、生きているなあ(生命)と感じました。

今は道が舗装され、便利になった分自然は失われていっています。私はへ

んな道が好きだと体感しました。これからもずっと残してほしいと心から思いました。

人間……。このお遍路の「お接待」を通じて、人の心の広さを知りました。

あるおばさんは私達を見ると、笑顔で「これを持って行きなさい」とい

ろいろな物を差し出してくれました。前もって準備

して「まだか、まだか？」と心待ちにしていたくれた人もいました。なぜ、そこまでしてくれるのだろうか？と思

「お遍路」は人によって歩く目的、理由などさまざまで、得るものも違

うと思いますが、何時でも誰でも受け入れてくれます。今回は先生方のサ

ポート、そして友達同士

の励まし合いがあったか

ら歩き通せました。一人で歩くという事は、かなり大変だと思いますが、次は一人で挑戦したいと思いました。

福祉科一年

田村 和太

歩く辛さ思い知る

僕は歩く前、一つのテーマを決めていました。「歩くことによって何を学ぶか」「ただ歩くだけなく、歩

き遍路を終え、そのテーマの答えが分

今治明德短期大学の学生二十三人と教職員が歩き遍路の体験学習に挑んだ。

昨年度から正規の授業として組み入れ伊予路を歩き、今年は舞台を徳島県に移した。四月から講義が始まり白衣、スケジュールなども全て学生の自主制作。

霊山寺から平等寺までおよそ百四十キロ、五日間で無事歩ききった学生が得たものは……。彼らのレポートから抜粋して紹介しよう。



出発前のミーティングとテレビ局の取材陣

自然に触れ、人の優しさ知った

三日目は先達を担当しましたが、ペース配分が分からず道を間違え迷いそうになりました。みんなの協力がなかったら、

(次ページへ続く)



第1 番霊山寺山門からスタート

(前ページから続く)
ゴールできなかったかも知れませんが、四日目の急な上り坂で一人が動けなくなった時も、みんなが肩を貸し必死で登りました。「仲間」とは、生きて行くなかで絶対に必要なものと改めて感じました。この意識があったからこそ、ゴールした時のみんなの涙があったと思います。

第一番霊山寺へは昨年九月からのバス遍路とこの七月のお礼参り、そして今回を合わせて三度目の参拝である。憧れていた歩き遍路だけに、山門に立つとひとしおの感慨が去来した。
改めて記すべくもないが、四国八十八ヶ所は心身救済の霊場であり、人間が持っている八十八の煩悩を消滅せんがための

食物栄養科一年
(社会人入学)

藤田 豊子

伝わり合った仲間の気持ち

明德短大生の歩き遍路体験レポート (上)

「南無大師」必死に唱え

ものといわれる。

出発前夜、乳幼児のころから深く関わってきた八歳の男児と永遠の別れをした。さらに、最終日には同郷の幼友達との計報を受けた。故に歩き遍路の期間中、私は大きなショックから脱しきれず「人間の死」について想いを巡らさずにはいられなかった。

仏教について無知同然の私ではあるが、幼い頃から祖父母の唱える「般若心経」を毎日耳にしながら成人した。

すでに祖父母と両親の死を見守り、私自身六十歳に達してからは、おりにふれて自らの死をより強く意識するようになっていく。

もともと遍路は死出の旅と言われた。お棺のふたになる蓑笠、死装束の白衣に手甲、脚絆、墓標になる金剛杖を持つ遍路姿……。これが全て死ぬための仕度と知ってから、歩いてお遍路さんに出会う度、心の中で合掌するようになった。

この五日間の歩き遍路体験は、これまでの人生

において最も大きな感動を与えてくれた。ひとえに先生方や若い学友たちの励ましと、心のこもったお接待に支えられて、ようやく得られたものであることを忘れまい。

「遍路ころがし」といわれる四国霊場有数の難所・十二番焼山寺への山道は実に険しかった。乏しい体力をふりしぼり「南無大師遍照金剛」と必死に唱えずには歩ききれなかった。晴天の車道も難行苦行に等しく、体力と気力の限界を意識することが度々あった。

改めて、皆様のあたたかいご支援を思い返し、胸を熱くしている。同時に、今回の体験学習を終えて、私なりの「死」に対する心準備がほんの少しだけ前進するような兆しを実感している。

足腰の衰えは予想した以上と認めざるをえないものの、次回は独りで順拝を果たしたいと願いはじめていく。

「海道を暮れて歩ける遍路ひとり」誓子